

原田 國雄

I.3つの「世紀末大転換」と3つの「新世界」

A. 18世紀末大転換—イギリス;近代産業資本主義の成立

ヨーロッパ《三大革命》

①14世紀ルネサンス(個人の解放・自然の発見)・16世紀宗教改革(啓蒙思想)

②グロムエル革命(軍隊の中核;独立自営農民=近代市民社会における人間の自我, 個の観念の発生源)

*17世紀半ば~第2次エンクロージャ(独立自営農民の小規模経営の否定)

③18世紀末、産業革命(機械と大工業)

*《17世紀科学革命(ケプラー、ガリレイ→ニュートン総合)》

④アメリカの植民地化—1775年英の重商主義的植民地政策からの脱脚。英の綿工業の原料供給基地としての南部奴隷制農場主による棉作を基軸に世界経済に編入。

B. 19世紀末大転換—アメリカ資本主義が「新世界」として、イギリス・ヨーロッパを「旧世界」として歴史的に限定して現れる*。

(一)ヨーロッパ「大不況」=危機。植民地アメリカへの資本主義の移植。

①《大陸の広がりをもつ国家》「鉄道の産物」アメリカ;1887年鉄道ドイツ

2595Km, アメリカ20,722Km。ヨーロッパ過剰蓄積→アメリカの鉄道投資

(ブーム)。モルガンとロックフェラーの個人=投資銀行。金融寡頭制支配と世界の領土分割。

②大規模農業—その国内的基礎。

《西部の巨人》北西部・独立自営農民《フロンティア》「地主貴族もいなければ君主制もない純粋にブルジョワ的な基盤のうえに成長してきた—社会」(Engels)。

農業余剰→地方銀行→ニューヨーク金融市場。《世界唯一の金融自立国》

→「新世界」アメリカ資本主義の成立→20世紀=資本主義のアメリカ的段階。

*トーマス・ペイン『コモン・センス』岩波文庫(1776年)

帰結;英・ヨーロッパ「19世紀末大不況」(1873~96年)

I次大戦(欧州大戦)とロシア革命

(二)20世紀=資本主義のアメリカ的段階—「黄金の20年代」(I次大戦後のヨーロッパ 再建の軸)、農業大規模機械化。

③アメリカ「30年代大不況」=危機。ニューディール。独占の国家独占への転化。

《金融規制3つのP》Price金利「レギュレーションQ」/Product業務範囲「グ

ラス・スティーガル法」/Place 業務地域「マクファーデン法」。1936年金本位制崩壊。

◎ II次大戦と中国革命;1951年朝鮮戦争。1965年ベトナム戦争【アジア的社会主义世界成立】と戦後世界の三大革命勢力(民主主義・民族解放・社会主義)

◎ 恐慌対策=冷戦対策—最高にして最後の資本主義の統一的な世界編成の創出。 体制的独占(米1国=世界)。

イ)戦後冷戦体制の基軸—軍事的 IB(核・エレクトロ・ミサイル兵器の体系)創出。1940~45年マンハッタン計画(原爆開発)—1950年NSC68—1957年スプートニク・ショック。《20世紀科学革命・量子力学(ニュートン力学止揚)》と冷戦の産物。ロ)IMF, 世銀等の国際機関を通じて世界経済の循環過程を不換通貨たるドルが人為的にコントロールする。その仕組みは、金=ドル管理を金融的軸点にして各国の通貨を固定相場制でドルにリンクして、金本位制のもつ「安定性」と管理通貨制のもつ「拡張性」を合わせ持つという、最高にして最後の統一的な世界通貨制度。

C.20世紀末大転換—旧=現実世界における「最高にして最後の資本主義の統一的な世界編成」の瓦解

(一)ベトナム戦下の軍需インフレ循環の破綻

1971年金=ドル交換停止(ドルショック)—73年オイルショック—75年世界スタグフレーション→歴大な浮動的な遊休貨幣資本の堆積→利殖の機会設定。金融自由化(3P規制の撤廃)と金融革命(電子工学=デリバティブ)の必然。

(二)戦後冷戦体制の基軸解体。1975年アメリカのベトナム敗戦以降、再生産構造の再編—在来重化学基幹(鉄鋼・金属加工・自動車=「共同的労働」の体系)に代わってME基幹(半導体・コンピュータ・通信機器=「一般的労働」の体系)が経済基幹となる、生産のME化が進行した。もともと民需用に適合しえた産業であって、そのためにME化を主導した半導体産業がアジア Nies へ生産拠点を放出することにもなった(産業空洞化)。それまでアメリカだけが保持してきた自立的な国民経済編成の枠組みも、また30年代以来のニューディールの枠組みも、手ばなさざるを得ない。

IIINet 先行—Net]対応—Net 包摂

A. Net 新世界の先行的構築

資本と国家に先立って草の根のボランティアにより構築された Net が自らを「新世界」として打ち出し、そのことがまた現実の資本主義そのものを「旧世界」として規定するにいたった。

(一)1957年アメリカのスプートニク・ショックを機に国防総省 ODA で通信制御機構を、ソ連の核攻撃から防御するために中央集権型から自立分散型へ転換することになった。この「パケット方式によるアルパネット Arpanet の構築(Net の原型)にボランティアとして参加したリック・ライダーをはじめ、かれを慕って集まった大学

3
の科学者や研究者達は、ODAの意に反して、それを「公開・分散・共有」の科学の論理に従い平和、学術目的をもつ「ボランティアネットワーク」へと改革した。

(二)何がそれを可能にしたか—情報革命の「本流」と「逆流」

18世紀末大転換の場合、「三大革命」が作用した。アメリカの1960年代には、1)カウンターカルチャー(反物質文明・管理社会)とメディア革命が人間性と自由の希求、を掲げ、その一方で広範な市民の社会運動—環境保護、女性解放、社会福祉、黒人解放とベトナム反戦運動など—の高揚があった。それが人間能力の向上のためのネットワークへと押し上げた。

(三)1971年インテルがMPUを基盤としたマイクロコンピュータを、サンフランシスコのハードウェア・ハッカーズのクラブが試作。75年にフレッドムーアとリー・フェルゼンスタインがソル社とオズボーン社のパソコンを設計。そしてパロアルト研究所でステーブ・ウズニャックがアップルIIを設計(情報革命の「本流」)。

*科学史上における情報化段階

こうした証明のあとにIBMやAT&Tの独占体が、この分野に参入(情報革命の「逆流」)。念のため、この流れでは70年代にIBM(MODEL5100),HP(mode98130)が卓上型コンピュータを一部の企業向けに高額で発売。個人向けではMITSV8800の小型ミニコンと、互換機IMSA(8080)が計算やデータ処理用に手ごろな価格で発売された。

(四)ハッカー文化とNet新世界—独自の、Net的生産様式

1985年リチャード・ストールマン;ソフトウェア・ファンデーション創立。GNUプロジェクト。GPLのライセンス条項—フト共有=ソースコード公開コピー改良・配布・販売(ソースコードつき)の自由。クレジットの明確化。

1991年リーヌス・トーバルス; LINUXの開発; LINUXベースのGNUシステムとしてハッカーコミュニティに投げ込む—そこでハッカーたちのボランティア活動=協同作業で完全なオペレーティングシステムとして完成させる。

(五)《「自律的個体」から「社会的個体」への転成》

コンピュータのパーソナル化(分散化)によって無数の情報や知識の個人の社会的力能への転化が可能となり、またパソコンをフラットに双方向でつなぐコンピュータのネットワーク化(共有化)によって「自律的な個体」から「社会的な個体」への転成がますます現実味を帯びてくる。そこでは「諸個人の普遍的発展」を基礎とし、「諸個人の社会的力能としての彼らの共同的・社会的生産性を十全に駆使した自由な個体性が特徴である」。

《社会的個体》に関してマルクスは次のように述べている—

「人間労働は、もはや生産過程に内包されたものとしてはあらわれなくて、むしろ人間が、生産過程それ自体にたいし管理者ないしは統御者として関係する」。「労働者は、生産過程の主作用因ではなくなって、生産過程のいわば外に、あるいはその傍らに立つことになる。このような転換が生じると、生産や富の支柱は、人間自身が行う直接的労働でもなければ、彼が労働する時間でもなくて、人間自身の一般的

生産力の自己還元。すなわち人間が社会的存在であることを通じて自らのものとしているその知識と自然の支配という意味での一般的生産力の自己還元、一口で言えば、社会的個体の発展をその内容とするようになる」(Grundrisse der Kritik der politischen ökonomie, 1953. Dietz Verlag, pp.592-3)

資本主義は、もはや「旧世界」として「Net 新世界」により歴史的に限定されている限り、「Net 新世界」に対応していく以外に道はない。しかしそれは、そうした人類史的課題の達成に敵対的、阻止的に作用する。

B. 資本と国家の「Net 新世界」対応

ARPANET; 1982年 TCP/IP(73年 V.サーフ。R.カーン開発)標準プロトコルに採用。86年 Net は NSF へ、95年には長距離電話会社 MCI へ委譲。資本の Net への参入—80年末商用 ISP(プロバイダ)誕生。90年 CERN;ヨーロッパ素粒子研究所)におけるハイパーテキスト採用の World Wide Web の作成。93年イリノイ大学の NCSA 研究機関による Web ブラウザ「モザイク」の開発。—Web が Net の一部となることで NSF の Net は爆発的に普及し Net 上で研究と商用のさかいが曖昧になった。

(一) Net 対応の諸形態—WINTELCO から GAFA へ

◎パソコンへの対応—Microsoft; パソコンの OS ソフトのライセンス収入。OS 上で動くアプリも加えたユーザの囲い込み。広告収入。OS 作成過程への軍隊並み規律の導入。

◎ネットワークの通信速度が速くなった(光回線などのブロードバンド、携帯電話回線に使う3G・LTE、Wi-Fi 技術の進歩)とスマートフォン登場。OS 上で動くアプリが使えて携帯の機能が飛躍的に向上。—Apple; Net 新世界では、ユーザ個人が主役の自由な空間が、コミュニティーが作られ、個人が単に情報を消費するだけでなく、クリエイターとしても参加している。ところが Ipad アプリはパッケージ化されたコンテンツで消費者個人に提供し、消費者個人はオーディエンス audience として与えられたコンテンツを消費するだけの存在でしかない。アプリの作成、販売におけるアップルの厳しい審査が一部のセミプロユーザや企業による独占を生む。 아이폰の中国での過酷な生産環境。

◎データの通リ道の通信速度が高速化して、大容量の重いデータがやり取りしやすくなると、資本の Net 対応事業の支柱として《クラウドコンピューティング》が一挙に普及した。データやアプリの一部がパソコンの中に入っていない、インターネットにつながった先の「クラウド」上に存在する。利用者はユーザ名やパスワードの記入以外、パソコンやスマホでアプリのインストールやフォルダの作成などの作業から逃れられる。企業の場合、生産性や効率の向上から大幅なコストダウン、ハードウェアの準備や管理の負担軽減まで、そのメリットは大きい。だが、このシステムは Net 新世界を貫く「公開・分散・共有」の原理とは相反するところの、「現=旧世界」に固有の「集中・独占・私有」の原理が貫く中央集権的なシステムにすぎない。ユーザの「囲い込み」と、個人情報^①の集中、独占